

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2014年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	英米文学専攻
<b>研究代表者</b> (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程二年	熊谷 めぐみ 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	文学研究科・教授	新妻 昭彦 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
<b>研究課題</b>	Charles Dickens 後期作品のキャラクターに反映されるヴィクトリア朝社会規範と個人の葛藤		
<b>研究組織</b> (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程二年	熊谷 めぐみ	
<b>研究期間</b>	2014 年度		
<b>研究経費</b>	(支出金額) 199,198 円 / (採択金額) 200,000 円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、Dickens 後期作品を中心に、ヴィクトリア朝の社会規範、主に都市部の独身男性を取り巻く社会的なプレッシャーを、階級の違い等に注視しながら考察する。都市の中でも、Dickens の作品で重要な位置を占めるロンドンの表象、そして、ロンドンに生きるキャラクターたちに付与された葛藤を分析することで、1850年代から60年代のロンドンに生きる人々を取り巻いていた規範や価値観、都市特有の問題などを明らかにすることを目指す。前年度までの研究を踏まえ、後期作品に台頭する無気力な男性キャラクターと都市特有の問題との関連性を重視することで、彼らが無気力に沈むのが都市である必然性を提示する。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ Charles Dickens ] [ 都市 ] [ ヴィクトリア朝 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、Dickens 後期作品のキャラクターに反映されるヴィクトリア朝の社会規範と個人の葛藤について研究を行った。具体的には、後期作品に描かれた都市に生きる独身男性の葛藤、そして都市そのものの描かれ方について研究を行い、都市の中でも Dickens 作品で特に重要な位置を占めるロンドンの表象に注目した。都市と田舎の表象の歴史を概観し、Dickens 後期作品の研究を行うと同時に、都市と田舎を独自の観点から描いた作家として Saki の研究を行った。

## ① 都市と田舎の研究

ディケンズ作品におけるロンドンの表象を研究する上で、イギリスにおける都市と田舎の表象について研究を行った。Raymond Williams の *The Country and the City*、Martin J. Winner の *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850-1980* を主に用い、田舎と都会が英国においてそれぞれどのようなイメージを持ち表象されてきたのかを確認した。また、イングランドのナショナル・アイデンティティーとしての田園のイメージ、田園風景こそがイングランドの本質であるとする考えが 18 世紀以降顕著になり、19 世紀終わり頃から再び盛んになり、現在に至るまでの故郷としての田園のイメージを保ち続けていることを確認した。その背景として、産業革命、農業革命による農民の都市部への流出、帝国主義、ナショナリズムの高まり、人口過密で犯罪や疫病の多い都市への嫌悪などの社会的背景などがあり、田舎が賛美される一方で都市が軽視されてきた経緯を見るとともに、画一的な都市のイメージから踏み込んで、ロンドンの複雑さを示したディケンズの独自性と先見性を認識することができた。

## ② 都市の無気力な男性像

これまでディケンズ後期作品の主要キャラクターとして台頭する無気力な男性像について研究を行ってきたが、本研究では、彼らが内包する葛藤を、晩年の作者の姿勢の変化やジェンダーの点からの考察の他に、社会的背景との関連、そして都市特有の問題との関連を重視して考察を行った。対象とした作品は、*Bleak House*(1852-53)、*A Tale of Two Cities*(1859)、*The Great Expectations*(1860-61)、*Our Mutual Friend*(1864-65)である。

*Bleak House* では、リチャード・カーストンに焦点を当てる。リチャードの抱える問題は、仕事や興味が続かないことであり、楽観的で意欲には溢れているがまったく根気が続かないという人物である。リチャードはウィンチェスターのパブリックスクールに通っており、初めてロンドンに来たのが、遺産相続の裁判の関係者として呼ばれた 19 歳頃となっている。これまでの院での研究では、リチャードの根気のなさとその後の放埒な生活の原因を、語り手エイダの言葉から、彼の生き立ち、パブリックスクールでの詰め込み式の教育が、自分で考える意志を奪ってしまったという点に重点を置き考察してきたが、リチャードが *Bleak House* を出て、ロンドンに来たから、それまで問題になることはあっても深刻に陥ることがなかった彼の悪い面が一気に表出し、借金や墮落した生活へと転がり落ちていく点も、その生き立ちや教育環境に加え、重視していく必要を認識した。また、ロンドンの弁護士に操られ、助言をする周囲への誤った不信の念を植え付けられ、さらに腐敗したイギリスの裁判制度の犠牲者として亡くなるまで、もともと備わっていた性質がロンドンという環境に置かれることで、転落の一途を辿ることは、生き立ちと同じくらい重要な意味があることを認識した。

*A Tale of Two Cities* では、弁護士シドニー・カートンに注目する。カートンは、有能さを隠し、手柄をすべて友人に与え、愛する人も自身と瓜二つの人物に託し、無気力さと失意の中を生きる人物である。作品はロンドンとパリという二つの大都市を主な舞台とするため、他の土地との比較という点においては、都市特有の問題ということ断定しにくい、大都市特有の問題と言える人口過密は、パリの群衆の描写や、裁判所につめかけた死刑を娯楽として求めるロンドンの人々の描写に大衆の暴力性や残虐さという形で示されている。また、カートンへの人々の無関心は、都市の孕む別の問題も提示している。カートンは学生時代からすでに周囲の気力に気おされ、無気力な人物であったことが会話からうかがえる。このため、*Bleak House* のリチャードと同様、彼の無気力の原因をその生き立ちや教育環境に重きを置いて捉えていたが、ロンドンという都市がカートンに与える影響を探そうと試みた。その一つとして、カートンの失意や無気力が語り手によって語られる時、ロンドンの夜の街の描写と合わせて語られる点が挙げられる。この点について結論を出すには至らなかったが、ロンドンという街とカートンの孤独や失意はコントラストとして、あるいは共通するものとして作品に表象されているのではないかと考えており、今後検討を続けたい。また、財産相続を夢想するリチャードとは違い、カートンの失意や朽ちていくのを待ただけというほとんど絶望と言っているような無気力は、19 世紀末の倦怠に通じる要素を孕んでいると考えられる。その時、夜のロンドンに一人でいるカートンの描写というのは世紀末的な雰囲気に通じていると言えるかもしれない。また、カートンの分身的存在であるチャールズ・ダーニーは、ただ働くことを望み、そこに成功の理由があったと語られる勤勉な人物で、カートンの手柄を奪っていくもう一人の分身的存在である弁護士仲間のストライバーは人を押しつけて猛烈に成功を求め邁進していく人物であることが強調される。作品の時代

## 研究成果の概要 つづき

設定は 18 世紀後半だが、作品にはキリスト教福音主義のもと、勤勉や自助自立の風潮が蔓延したヴィクトリア朝の社会背景が示される。そしてダーニーはその好例として描かれるが、ストライバーは、ディケンズ後期作品において馴染みとなる、前期作品の肯定的な人物から一転して否定的な人物として描かれる、成功を求めて他人を蹴落としながら邁進する人物の悪例として描かれる。ここには、その後の *Our Mutual Friend* に見られるような、成功を求める人物への否定的な眼差しと、その風潮から取り残されてしまう人物への肯定的な眼差しが存在している。しかし、この作品において社会的に成功するのはダーニーやストライバーであり、カートンの存在は社会的にほとんど無視されている。

*The Great Expectations* は主人公で語り手でもあるピップが、財産を受け継ぐことでテムズ川下流の沼沢地帯から、物語半ばでロンドンに出ていくため、田舎と都会のコントラストが際立つ作品であり、ピップの経済状況による身分の変化と田舎から都会への場所の移動が連動している様子が描かれる。ピップが紳士としての教育を受けるためには、彼が住む生活環境のみならず、土地からも離れる必要があるのであって、紳士になるためにはロンドンという場そのものが価値を持つことが示される。ピップは田舎での勤勉な徒弟生活から一転、ロンドンで享樂的な生活に墮落し、借金を重ねていくが、同時に無気力にも陥っていく。作中、子供の頃からのピップの悪癖や無気力というものは語られないが、愛を寄せるエステラへの身分さによる強烈な劣等感は存在し、財産相続の見込みによる過剰な期待と享樂的なロンドンのクラブへの参加によって、散財と自墮落な生活へと堕ちていく。この点でピップもまた、幼少の頃に備わった意識（ピップの場合は身分さによる劣等感）がロンドンという場所で散財の機会とクラブのような墮落した生活を奨励するような場を得たことで悪い意味で花開くという見方ができるように思われる。同時に、劣等感に苛まれながらも、田舎では彼を保護してくれる義兄のジョーがおり、本当の孤独に苛まれることはなかった。しかし、ロンドンでの派手な生活は、彼のコンプレックスを隠してくれるようで、実際は一層孤独感が増し、さらなら享樂的な生活へ逃げるという悪循環を引き起こすことになる。ロンドンが孕む様々な誘惑の機会に、田舎育ちで都会に憧れを抱くピップは抗う術を知らないままその環境に染まってゆく。そして病気になって最後にはロンドンを離れ田舎に戻ることを望むのだが、その時、田舎に彼の居場所は存在しない。ロンドンでの生活は、ピップを墮落させるだけでなく、田舎との繋がりを絶ち、帰る場所を失わせてしまう。

*Our Mutual Friend* はこれまでの研究と重なる部分が多いが、弁護士のユージーン・レイバーンとモーティマー・ライトウッドの無気力への葛藤を語り手がロンドンの一地域の若者特有の問題として語っていることは、ロンドンという都市と無気力さが結びついていることを作家が意識的に描いていることを示している。今後さらなる研究を続ける必要があるが、これらの研究から、ディケンズ後期作品における無気力な登場人物の台頭に着目する場合、その舞台が都市であり、ロンドンであることの必然性が重要となっていることがわかる。ヴィクトリア朝ロンドンにおいて、他人をおしのけ、成功しなければいけないという風潮が、勤勉や自助自立という言葉の裏に存在しており、ディケンズはこの事実をロンドンにとりわけ顕著な問題として無気力な人物に投影していると思われる。混沌の中を突き進む大衆に対し、取り残されざるをえない、または階級によっては進んで取り残される道を選ぶ人物が無気力に沈むのは、都市であり、ロンドンでなければいけなかったのではないかと。

## ③ Saki の都市と田舎

ディケンズのロンドンの表象を研究する上で、他作家のロンドンの表象も考察した。今年度は Saki を研究し、1911 年に出版された短編集、*The Chronicles of Clovis* から都市と田舎を独自の点で表象した作品を複数取り上げた。特に、“*The Peace of Mowsle Barton*” は、都市のイメージとして想起される「騒音」と田舎に結び付けられる「静けさ」のイメージ、その静けさがもたらす「安らぎ」といった既存の概念が、作中で拒否され反転された形で示されることに着目し、単なる風刺物語を超えた、イギリス文学における都市と田舎をめぐる表象の変化を内包する重要な作品としての再評価を試みた。主人公クレフトンは都市の暮らしに疲弊し、理想的な田舎での牧歌的な生活を夢見て移住してくるが、田舎の現実と直面し、またそこに安らぎを見出すことが出来ずに逃避先の田舎から、再び都市へ逃避していく人物として、滑稽に描かれる。このようなクレフトンの姿は当時の田園礼賛信仰や都市への嫌悪を示しており、それに対して否定的な視線を向ける Saki の姿が伺える。同時に都市に逃げ帰り、喧噪と雑踏の中で安らぎを得るクレフトンの姿には、都市を肯定的に評価する視線も垣間見え、田園信仰への懐疑と都市の肯定という時代背景を敏感に写し取った本作品は、都市観の転換を見るうえで時代性と先行性を備えた重要な作品であると位置づけた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学会発表

1. 日本英文学会関東支部第10回大会 (2014年度秋季大会)、2014年10月26日、「Sakiの“The Peace of Mowsle Barton”における「安らぎ」と「静けさ」の表象」(上智大学)
2. 2014年度立教英米文学会、2014年12月20日、「Sakiの *The Chronicles of Clovis* における田舎と都会の表象」(立教大学)